

北陸におけるアタマアブについて

望 月 正 巳

Masami MOCHIZUKI: On the Pipunculid fly in Hokuriku district

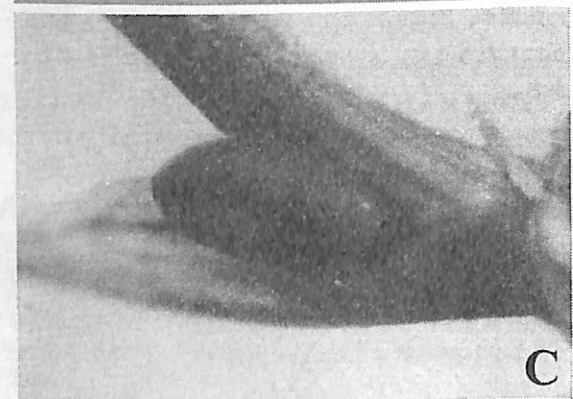
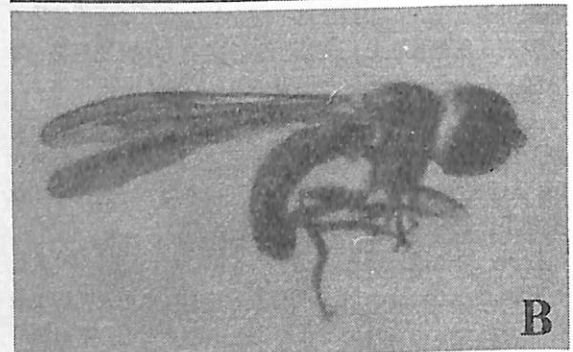
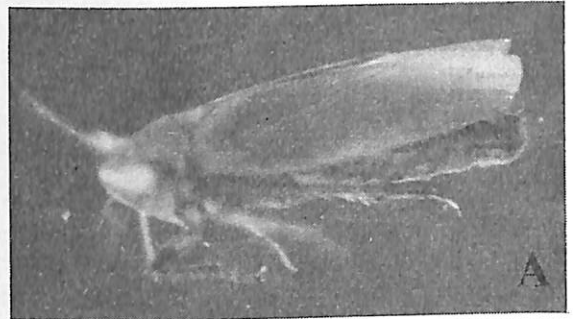
昨年北陸におけるツマグロヨコバイ (*Nephotettix cincticeps* Uhler) の越冬期には、アタマアブ (Pipunculid fly) が有力な天敵として働くことを明らかにした¹⁾。その後更に新しい知見を得たのでその2, 3を報告する。

昨年より引続き飼育中のツマグロヨコバイの越冬幼虫 (小杉産) は、昭和55年4~5月に成虫となった。このうち、4個体 (雄の雌斑型 第1図, A) の腹部第1節間膜背面を破り、黄白色のアタマアブ老熟幼虫がそれぞれ1頭ずつ脱出した。脱出後の3頭の幼虫は稲苗上で蛹化し、1頭は幼虫のまま死亡した。蛹は体長2.3~2.5 mm, 体巾1.2~1.3 mmの小さな黒褐色の俵状であった (第1図, C)。4月に蛹化した個体の蛹期間は23日、5月に蛹化した個体の蛹期間は14日であった。これらの蛹からツマグロツヤアタマアブ (*Alloneura oryzaetora* Koizumi) の雌1 (第1図, B), 雄2頭が羽化した。また昭和55年5月に富山市月岡地内にて採集したツマグロヨコバイ成虫 (雄の雌斑型) 1頭から、ツマグロツヤアタマアブの老熟幼虫1頭が脱出し、蛹化そして羽化 (雄) に成功した。蛹期間は15日であった。

昭和55年4月以降12月にかけて、小杉地区の水田とその付近でツマグロヨコバイを採集し、これを実体顕微鏡下で解剖してアタマアブの寄生の有無を調べたが、被寄生個体は皆無であった。一方11月に富山大学教育学部農場内水田 (富山市西田地方町) で採集したツマグロヨコバイ幼虫から、任意に選んだ11頭を実体顕微鏡下で解剖したところ、アタマアブ寄生幼虫を4頭発見した。

昭和54年4月に、石川県金沢市内灘と長野県南安曇郡穂高町有明にて採集したツマグロヨコバイを、上記同様の方法で調査したところ、有明産ツマグロヨコバイからアタマアブ寄生個体1頭を発見した。

昭和51年5月~10月、富山県上新川郡大沢野町笹津で採集したツマグロヨコバイの乾燥標本を、昭和55年6月に苛性ソーダ液で軟化した後水洗し、実体顕微鏡下で解剖したところ、9月採集の個体 (199頭) から、12頭のアタマアブ寄生個体を発見した。しかし、昭和55年6月



第1図A 寄主となったツマグロヨコバイの雌斑型雄成虫
第1図B ツマグロツヤアタマアブの雌成虫, 体長30mm
第1図C 稲苗上のツマグロツヤアタマアブの蛹

～11月に同上地区で、ツマグロヨコバイに対するアタマ
アブの寄生率を調査したが、被寄生個体は皆無であつ
た。

引用文献

- 1) 望月正己 (1980) ツマグロヨコバイとヒメトビウ
ソカの越冬期の天敵について、北陸病虫研究 28: 39.
(1981年6月3日受領)

